



| | |
|------------------|---|
| Title | 北米合衆國最近の農業波動 |
| Author(s) | 渡邊, 侃 |
| Citation | 北海道帝國大學法經會法經會論叢, 9, 331-346 |
| Issue Date | 1941-04 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/10707 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 9_p331-346.pdf |



北米合衆國最近の農業波動

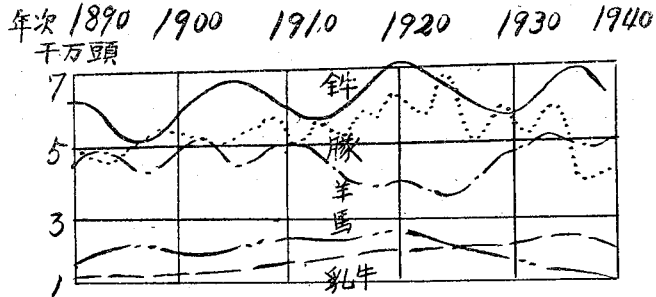
渡 邊 侃

一九四一年に北米合衆國未曾有の第三選ルーズベルト大統領と前農務長官ワレラス副大統領が登場する。其の二任期間世界恐慌の對策新手段(ニューディール)と農業調整行政の立役者であつた。巨大な經濟政策のからくりが彼等の人氣を立てたとも考へられる。だがその大芝居も時の運命とか潮流とかの一徴候にすぎないとも考へられるのだ。彼の國で最大の發達を遂げた資本主義がやがて自壞するとか新しき段階を開くと云ふのではない。多くの産業が興り又亡ぶであらう。併し全體としての經濟は減びることはない。唯波動すると云ふのである。波動の原因が何であるかに關する二三の學説を掲げて見やう。

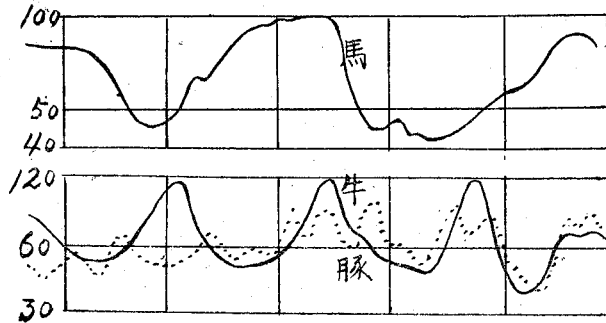
ムーア(1)は北米合衆國中部(ミシシッピ河谷)の降雨量が約百年の周期で波動し、其の多い年に農産が豊かで價格が下落し、其の少い年に農産が少く價格が騰貴することの實證を試みた。商工業界は此の農業界の價格變動に從つて其の價格を變ずるものであるとなす。

ワレン及びピアソン(2)は植産畜産の農産並びに商工業界に涉つて一生産物一商品其他一事象毎に獨特の波動をなものとす。其顯著な例は畜産で、各種家畜の増殖周期が異なるに従ひ、それを長短の周期とする波動があるとなす。豚は妊孕期間約三ヶ月生長完成約一年である。牛は同十ヶ月及三年、又馬は同十二ヶ月及び四年位である。それで、豚の周期は約三―四年、牛のそれは七―八年、馬のそれは十年内外であると云ふ(屢々其倍位の周期と

北米合衆國農場飼養家畜頭数(3)



同上農場家畜價格指數(4)



なるやうだ)。即ち何等かの刺激で増産が希望されても實現は半周期後で、其際過度増産によつて反動としての減産希望が起り、波動を繰返すと云ふのである。

統計圖で見るとワレン及びピアソンの説の如く各家畜はそれ／＼獨特の規則正しい波動で其數を増減し其反對に價格を上下して居る。豚と羊との波動が全く喰違つて居るのも面白い。屠殺目的(肉用)家畜が著しく波動するに對し馬及乳牛の如き生かして用ふる家畜はあまり波動せぬ。併し短期變化が著しい豚でも長期變化がなくはな

5. ことを注意せねばならぬ。

ワレン・ピアソンの理論では、經濟循環の全體を通ずる一般的なる波動があるのではなく、個々の波動狀態を平均せる指數の如き假想的なるもの、又は各種波動の位相が一致したる場合に起る恐慌の如きもの、が存在するのである。

他の一派の人々は、ムーアの様に氣候の變化によると云ふ如き明白なる基礎原因を擧げないけれども、とにかく景氣循環なる現象ありとし、個々の波動はそれに連れて起るものとする。

其の一派の人シユムペーター⁵⁾はワレン等の家畜循環説を批評する、「豚價は上述の關係で殆ど完全に豫言される如くである、即ち豚市場は全く供給の變動に支配され、其供給變動が亦全く機械的と見られる。併し一般經濟の循環に關係なき特殊循環を證明することは未だ確實とは云はれない。豚價圖形を見ると餘りに規則的で反應の特殊機構としか考へられない」とする。

シユムペーターは經濟循環説を奉じ、コンドラチエフの發見した五十年周期、ジュグラの同じく十年周期、及びキツチン等の同じく三年周期の、合成による大小の波動を以て經濟變動を説明し豫測せんとする。種々なる景氣政策が有効であるとすれば波動に乗つたからであり、其効果が屢々誇大に宣傳さるゝものとする。

私は其の長短大小の波動の原因が經濟界の創始更新イニシエーションにありとなす學説を承服することは出来ないが、何か規則的な長短の波動を起す原因があり、それに各種經濟事象が動かされてそれ〴〵の特有の變動をする、と考ふることは出来る。

此處では最近米國農業界の波動を描寫し多少の分析を試みやう。

シユムペーターは第一次歐洲大戰以後の長期波動に就て次の如く説明する。

「農業界の革新と云ふよりは、他の發明を農業に應用したものの、例へば内燃機關・電力及其應用・新肥料の如きが入つて來た。然るに此の革新が景氣の下降期に於て完全となるのが普通であつて、生産地を移動せしめ、其の生産費を切下げ、原生産地をして競争に堪へざらしめる。戦争によりて激化された各國の競争・關稅障壁・需要の變化・收穫の變動・其他が之に伴ふて全畫圖を編成する。長期波動の下降期は農業沈帶アグリアンデプレッションの時期である。農産物價格の下落は實價としても亦他物價と比較しても下る。勿論それだけで恐慌が來るのでない。負債の重壓が感

ぜられて來るものである。戦争の爲めに價格が上つた際無用の投資の爲めの負債が起される。例へば土地の購入とか、生産設備の不全完なる擴張とかである。

合衆國全體を例にとると、第一次歐洲大戰前（一九一〇年）の農場抵當負債は三十三億弗であつたが、戦後の一九二〇年には七十八億、二五年には九十四億となつた。

機械の使用及農産物の増加に就ては特に述べる必要もない。人勞力の能率増進、従つて節約による生産費の切下が價格の下落に相應する間は甚しい恐慌は來なかつたかも知れぬが、過剰生産は累積して世界的恐慌を來したのである。」

次に一九三三年より一九三五年に到る北米合衆國の經濟恢復を論じて云ふ。

「一九三一年には恢復政策は微々たるものであり一九三二年には重要とはなつたが決定的にはならなかつた。此間に經濟循環關係があつたかどうか、或學者は明白に之を否定する。併し、一九一四年又は一九二九年に資本主義の完全に新しき段階が開けたとも云ひ、更に一九三三年全く新しきそれが幾分急激に開かれ、新しき分析が必要になつたとも云ふ。吾人は原理の問題よりは事實の問題に接すべきである。事實としては大戰後大恐慌に至る間の主要推移が過去經驗からの豫測と一致せるものであつた。吾人は停滯状態を刺戟して昂揚せしむる行政操作なしに經濟組織自身が恢復作用を營み得たかと云ふことを問ふことの必要を認めぬ、如何となれば實際したからである!」

…一九三二年の經濟恢復が組織作用の正常經過でないと思ふものはフーヴァー氏が潮流を轉じたと思ふがよい、彼の行政が、政界の小反抗を除いては、彩旗を靡かせ拍手を受けて登場したことに政治心理としても賛同すべきものがあつた、一繼起する事態のどの一つもが組織作用の結果であり、政府操作の效果も單に支配するのではなく支配されて起るのである。政府操作はさうするより方法がなかつたと云ふべきだ。論理はともあれ一六世

紀以來作用し一九三二年迄及んだ経過が一九三三年三月四日に急停止するとはどうしたつて考へられない。經濟のみならず一般の政策が、其の作用せんとする經濟狀勢より發生し且形成されることを指摘出来る。

一九三三年春の形勢は短期乍ら強權をして計畫制を採用するか亦は之を排斥するかの瀬戸際に立たせた。斯く焦點を集中すれば恢復作用に適應した立法と然らざるものを區別出来る。實際効果ありしものとして掲ぐべきは一九三三年三月の緊急銀行法、同じく六月の銀行法、五月の緊急農場救濟法、六月の自作農融資法、一九三四年一月の農場抵當金融會社法等で停止せる金融を動かし所謂地方勤儉を奨励したにある。之等の作用が恢復を結果したと云ふのではない、刺戟と云ふよりは條件を備へて次段の恢復作用を營ましめたのである。即ちそれなしには遅延または冗費を來したであらう。但し新手段、國民經濟恢復法、農業調整法等と雖も質的に異なるものではない。彼等が正常の資本機構を無力にし又は代置したる部分もないではないし、國民經濟全體としては矯正作用はしたが、特に建設をなしたと思はれぬ。

農業調整行政は國民經濟恢復政策と異り、緊急のみならず根本的條件を創造せんとする長き改革を急に先頭に掲げた様のものである。農場の大量的流通、工業界の失業者にして工業界自身が處理し得ざるものの農業への轉出、地方への再移住の促進等が平衡を恢復する自動的方法であるのに、全く反對で維持し難き方法が採用された。即ち、農業界の尺度による不均衡を、工業界の尺度による餘剰で、是非とも賄ふ。之によつて善意の農家を破産より救ふ爲め金融し農産物販賣特に輸出を國營化し、生産を嚴格計畫に従はしめる。之等の方法は違憲であり民意に背馳し、種々の邪道に陥つた、特に加工税の歸屬其他に解決のつかぬ問題を起した。實際の効果を分析し難い、(實際恢復はしたが)早魃による減收は契約減反より効果があり、ドルの減價(即ち物價騰貴)が起り又一般的恢復があつたからと云ふ方が眞に近い。努力された煙草政策はカー・スミス法に表現され効果甚大と呼ばれるが需要の著増が有利に働いて居り、酪農政策は(不景氣の際は酪農がよいのだから)大して必要がなかつた。小

麥政策は一九三三年から三六年迄の旱魃で價格騰貴の結果は得た、小麥作農家の實益は加工税によりて賄はれたる三億二千六百萬弗になる恩恵金が補助となつた様のものである。綿花だけは自然的障得がなく、バンクヘッド法其他の強行によつて減段が行はれ（一九三三年の反別が一九三四―三五年には四分一減となつた）一九二九―三一年の聯邦農務局買上貯藏品三百萬捆が市場を壓迫したにかゝはらず價格が二倍に昇つたのである、即ち有効だつたが尙貨幣政策の結果でもあらう…之等農業政策は結局九億弗と云ふ冗費を初期には自給出來ると稱したが出來なくなつて國庫に課した…之を要するに政府の收入創造の効果を謬なく見せる徴候を蒐集することが出來る、にもかゝらず統計圖は、之等の要素なくして恢復したる場合と、大差なきものである…其故に小なる波動を平均して見ると費用投下の効能は大でなかつたと考へ得る、少くも費用投下が大なる効果を擧げると云ふ考へ方より、正常恢復の發展を考へる方がより安全（投機的でない）と考へられる。

以上の處論からすれば經濟政策の效果は時運の如何によるものであつて、根本的に大勢を動かすことなどは出來ないものである。果して然るやば事實を分析しても容易には決し難いものであらう。

此處ではシユムベーター等によつて分析された以後、即ち一九三五年以後の農業界の状態を管見しやう。(5)
一九三九年の收穫面積は左の如く（面積單位千噶ユーカー以下同斷）順位で列べられる。

| | | | | | | | |
|--------|-------|-----|-------|--------|-------|----|-------|
| 玉蜀黍 | 八、八〇三 | 大麥 | 三、六〇〇 | 亞麻（種用） | 三、八四〇 | 米 | 一、〇九二 |
| 牧草（全部） | 六、四四五 | 蜀黍 | 八、〇四五 | 煙草 | 一、九四〇 | 甜菜 | 九三 |
| 小麥（同） | 三、六九六 | 大豆 | 四、三二六 | 落花生 | 一、八五九 | | |
| 燕麥 | 三、〇三〇 | 雷麥 | 三、八二一 | 菜豆 | 一、五五四 | | |
| 綿花 | 三、九二六 | 馬鈴薯 | 三、〇〇〇 | 紅豆 | 一、三五五 | | |

之等の内玉蜀黍・牧草・燕麥・大麥・蜀黍・雷麥・大豆等が主として家畜飼料たるものであるから、驚くべき畜産偏重である。之で飼はれる家畜頭數は一九四〇年一月一日現在（單位千頭）

全人口一人當一乳牛の割合の家畜ありと考ふべきである。

備考

A 穀物消費家畜換算は乳牛一、他牛〇・五一、豚〇・八七、羊〇・〇四、馬及騾一・一四の係数を用ふ、
 B 乾草消費家畜換算は乳牛一、他牛〇・七五、羊〇・一二、馬及騾一とす、
 (A Bの平均が全換算数に近い)、
 D 鶏は百羽に付四・五としてAに加ふ、

家畜の農場價値は四十九億弗位である、外に二億六千萬弗値の鶏が居る。

斯く計算したる家畜頭數に對比して飼料は如何程生産せられたかと云ふに次の統計が見られる。

| 年次 | 家畜一單位當 | | 放牧地成績 (%) | 年次 | 家畜一單位當 | | 放牧地成績 (%) |
|------|---------|---------|-----------|------|---------|---------|-----------|
| | 穀物 (封度) | 乾草 (トン) | | | 穀物 (封度) | 乾草 (トン) | |
| 一九一九 | 一、五九四 | 一、三六 | 八・四 | 一九二六 | 一、六五 | 一、二九 | 七・七 |
| 一九二〇 | 一、八八六 | 一、六四 | 八・三 | 一九二七 | 一、六九 | 一、四三 | 八・六 |
| 一九二一 | 一、八四一 | 一、七五 | 八・八 | 一九二八 | 一、六六 | 一、三〇 | 八・三 |
| 一九二二 | 一、五九六 | 一、三三 | 八・五 | 一九二九 | 一、六四 | 一、四九 | 八・〇 |
| 一九二三 | 一、六五七 | 一、二七 | 八・六 | 一九三〇 | 一、四六七 | 一、〇七 | 七・八 |
| 一九二四 | 一、五〇八 | 一、二七 | 八・七 | 一九三一 | 一、五五六 | 一、〇三 | 七・〇 |
| 一九二五 | 一、七六八 | 一、二六 | 七・四 | 一九三二 | 一、七七五 | 一、一五 | 七・八 |

| | | | | | | | |
|------|-------|-------|------|------|-------|-------|------|
| 一九三三 | 一、四七六 | 一、〇〇〇 | 六五・七 | 一九三七 | 一、七四〇 | 一、一四三 | 七二・二 |
| 一九三四 | 一、一三五 | 八三六 | 五〇・八 | 一九三八 | 一、八四九 | 一、三三五 | 八二・三 |
| 一九三五 | 一、六〇八 | 一、八三三 | 七〇・〇 | 一九三九 | 一、八〇三 | 一、七三一 | 七〇・三 |
| 一九三六 | 一、四七七 | 一、〇六二 | 六六・三 | | | | |

此の表で見られることは一九三四年（昭和九年）及一九三六年（昭和十一年）の早魃で家畜飼料の收穫が甚だ少かりしことである。此の早魃は玉蜀黍・春播小麦・同大麦・燕麥等にも著しい影響を與へて居るものである。各種家畜の頭數を激減し其の價格を高めて居る。唯全ての牛の頭數の如き減少の周期にあつたので其の傾向を強めたゞけである。而も豚よりも價格變動への影響を大に受けて居る様だ。

穀物中面積最大なる玉蜀黍（總體）の統計は次の如くである。

| 年次 | 收穫面積 | 放棄面積 | 收穫量 | 千物高 | 噓當收量 | 物當單價 (一〇・五—翌九・一五) |
|------|---------|------|-----------|-----|------|----------------------|
| 一九一九 | 九八、四五 | | 二、六七八、五四二 | | 二七・三 | 一五・五 |
| 一九二〇 | 一〇一、三五九 | | 三、〇〇〇、六〇四 | | 三〇・三 | 六二・一 |
| 一九二一 | 一〇三、一五五 | | 二、九二六、四四三 | | 二八・四 | 五四・三 |
| 一九二二 | 一〇〇、四四五 | | 二、七〇七、三〇六 | | 二七・〇 | 七六・七 |
| 一九二三 | 一〇一、二三三 | | 二、八七五、二九三 | | 二八・四 | 八四・〇 |
| 一九二四 | 一〇〇、四〇〇 | 四五九 | 二、三三三、一三三 | | 二三・一 | 一〇五・八 |
| 一九二五 | 一〇一、三三一 | | 二、七九六、三六七 | | 二七・六 | 七二・〇 |
| 一九二六 | 九九、四五三 | 二〇八 | 二、五四六、九七三 | | 二五・六 | 七四・九 |
| 一九二七 | 九九、三五七 | 一〇三 | 二、六六六、二〇〇 | | 二六・六 | 八五・八 |
| 一九二八 | 一〇〇、三三六 | 六三 | 二、六五五、五二六 | | 二六・六 | 八四・〇 |
| 一九二九 | 九七、八〇五 | 九三 | 二、四二〇、三〇〇 | | 二五・八 | 七九・九 |
| 一九三〇 | 一〇一、四六五 | 三三八 | 二、四〇〇、〇〇〇 | | 二〇・五 | 五九・六 |

| | | | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 一九三一 | 一九三二 | 一九三三 | 一九三四 | 一九三五 | 一九三六 | 一九三七 | 一九三八 | 一九三九 |
| 106,933 | 110,577 | 101,933 | 92,354 | 95,804 | 93,010 | 93,741 | 92,333 | 88,803 |
| 1,557 | 1,484 | 2,564 | 7,453 | 2,568 | 7,579 | 2,610 | 1,467 | 2,698 |
| 2,575,611 | 2,931,318 | 2,399,633 | 1,461,133 | 2,303,747 | 1,507,089 | 2,651,284 | 2,521,957 | 2,619,137 |
| 2,401 | 2,605 | 2,306 | 1,588 | 2,400 | 1,683 | 2,813 | 2,703 | 2,905 |
| 330 | 309 | 523 | 805 | 655 | 1045 | 520 | 504 | 504 |

玉蜀黍の栽培面積の増減は小麦よりは遅れる。玉蜀黍の主たる用途は家畜飼料であつて子實のみならず莖稈も用ひらるゝことは人も知る。播種された面積中放棄さるゝものは小麦の場合より甚だ少ない。之れは必ずしも不作がないからでないことは尙當收量には大なる變化があることで知られる。收量が悪くても家畜を放牧して採食せしめる様の方法で收穫することになるのである。

收量の變化が價格に及ぼす影響は甚大である。國內需要を主とし又外國との關係が少いから、小麦より價格變化が甚しいのである。

玉蜀黍豚價格コウケンポーク比と云ふものが計算される、豚生體量一〇〇ポンドの價格に相當する玉蜀黍のブツシエル數である。最近の此の比價は、豚價に激しい變化がないことによつて、大體玉蜀黍價格の逆數である。豚價は玉蜀黍價格に追隨する。即ち玉蜀黍價格が騰貴すれば豚の飼料としての利用が減じ、豚の供給が減じ、其價格を高めると云ふ經過の故であらう。

次に小麦は左の如くである。

北米合衆國最近の農業波動

| 年次 | 冬小麥 | | | 春小麥 | | |
|------|--------|--------|---------|--------|--------|---------|
| | 收穫面積 | 放棄面積 | 百同麥上面積率 | 收穫面積 | 放棄面積 | 百同麥上面積率 |
| 一九一九 | 50,400 | 6,400 | 11 | 33,200 | 2,700 | 11 |
| 一九二〇 | 40,800 | 5,000 | 11 | 31,400 | 5,300 | 13 |
| 一九二一 | 45,600 | 2,200 | 15 | 31,800 | 7,600 | 14 |
| 一九二二 | 41,800 | 5,700 | 12 | 19,800 | — | — |
| 一九二三 | 51,700 | 6,600 | 15 | 16,100 | 8,400 | 15 |
| 一九二四 | 54,400 | 3,300 | 18 | 17,000 | 3,300 | 11 |
| 一九二五 | 31,600 | 8,900 | 13 | 10,800 | 2,500 | 13 |
| 一九二六 | 45,500 | 5,000 | 17 | 19,000 | 1,000 | 15 |
| 一九二七 | 51,500 | 5,300 | 13 | 21,800 | 9,000 | 11 |
| 一九二八 | 51,500 | 11,700 | 10 | 21,700 | 10,400 | 11 |
| 一九二九 | 41,100 | 2,700 | 16 | 23,100 | 7,300 | 15 |
| 一九三〇 | 41,000 | 3,500 | 19 | 21,800 | 5,500 | 15 |
| 一九三一 | 45,400 | 2,900 | 15 | 14,300 | 6,100 | 10 |
| 一九三二 | 51,000 | 7,200 | 17 | 21,600 | 9,500 | 15 |
| 一九三三 | 50,100 | 14,700 | 13 | 19,100 | 4,800 | 10 |
| 一九三四 | 45,600 | 9,400 | 13 | 8,600 | 10,200 | 10 |
| 一九三五 | 51,400 | 13,600 | 15 | 17,600 | 4,300 | 15 |
| 一九三六 | 45,600 | 11,000 | 10 | 11,100 | 11,600 | 10 |
| 一九三七 | 45,700 | 10,600 | 17 | 17,000 | 5,600 | 17 |
| 一九三八 | 45,700 | 6,400 | 13 | 10,400 | 5,000 | 13 |

| 年次 | 冬・夏 穫兩面 積麥 | 同上 噓當 收量 | 平均 單價 (其年七月より 翌年六月迄) | 生産 總量 |
|------|------------------|----------------|-------------------------------|----------|
| 一九一九 | 七三、七〇〇 | 二・九 | 二八・六 | 九五三、〇九七 |
| 一九二〇 | 六二、三五八 | 二・五 | 一八・九 | 八四三、二七七 |
| 一九二一 | 六四、五六六 | 二・七 | 一〇四・四 | 八一八、九六四 |
| 一九二二 | 六一、三九七 | 二・八 | 九八・〇 | 八四六、六四九 |
| 一九二三 | 五六、九二〇 | 二・三 | 九二・四 | 七五九、四八三 |
| 一九二四 | 五三、四六三 | 二・〇 | 二七・八 | 八四一、六一七 |
| 一九二五 | 五三、四四三 | 二・八 | 一四五・九 | 六六八、七〇〇 |
| 一九二六 | 五六、六二六 | 四・七 | 二二・八 | 八三三、二二三 |
| 一九二七 | 五九、六二八 | 四・七 | 一〇三・六 | 八七五、〇五九 |
| 一九二八 | 五九、三二六 | 四・七 | 二〇・五 | 八一四、七三三 |
| 一九二九 | 六三、三三三 | 三・〇 | 一〇三・六 | 八三三、二二七 |
| 一九三〇 | 六二、六二四 | 四・三 | 六七・一 | 八八六、四七〇 |
| 一九三一 | 五七、六八一 | 一・六 | 三九・〇 | 九四一、六七四 |
| 一九三二 | 五七、八三九 | 三・一 | 三六・二 | 七五六、九三七 |
| 一九三三 | 四九、四三八 | 二・二 | 七四・四 | 五五二、六八三 |
| 一九三四 | 四三、〇〇〇 | 三・一 | 八四・八 | 五二六、三九三 |
| 一九三五 | 五一、二二九 | 三・三 | 八三・三 | 六二六、三三四 |
| 一九三六 | 四八、八六三 | 二・八 | 一〇三・六 | 六二六、七六六 |
| 一九三七 | 六四、四三三 | 三・六 | 九六・三 | 八七五、六七六 |
| 一九三八 | 六九、八六九 | 三・三 | 五六・一 | 九三三、〇〇一 |
| 一九三九 | 五三、六九六 | 一・四 | 六七・六 | 七五四、九七一 |

(十一月迄)

小麦の増減産は、歐洲戰爭末及後期、所謂繁榮の末期及最近に起つて居る、約十年間隔である。而して夏小麦

即ち春播小麥の増反が速で、冬小麥即ち秋播小麥のそれが遅くなつて居る。一年生と二年生との作物としての適應性の差と云ふべきか。

北米合衆國の農産上統計上注意すべきは收穫面積に重きを置き（播種面積は豫想的に報告されるが次の放棄面積を出すに用ひらるゝ程度のものである）特に麥類で放棄面積が巨大なことである。放棄の原因は秋播小麥の冬損及秋播春播共に早魃であつて低減されたる收穫面積當りの收量も亦少ない。價格關係も放棄の決定には参加するのであらう。一九三四年及三六年に春播小麥で五〇%以上、秋播小麥で二〇%以上が放棄された。秋播小麥では三三年及三五年に三〇%内外放棄されて居る。（本邦農業などから見れば想像も及ばぬ不經濟である）價格は増産の際之に少し遅れて下落し減産の場合直ちに騰貴する様だ。之れは貯藏持越と關係があらう。

次は綿花である。此の作物は中南部で作られ労働と資本を集約に用ふ。労働は人も知る黒人のそれ、資本は人造肥料で之れは北米合衆國使用量の半分に及ぶと云ふ。屢々連作される。（いづれも工藝栽植作物の特徴である）耕作されたものゝ放棄さるゝことは著しく少い。一九三三年に約三分一の放棄があつたのは全くの例外である。

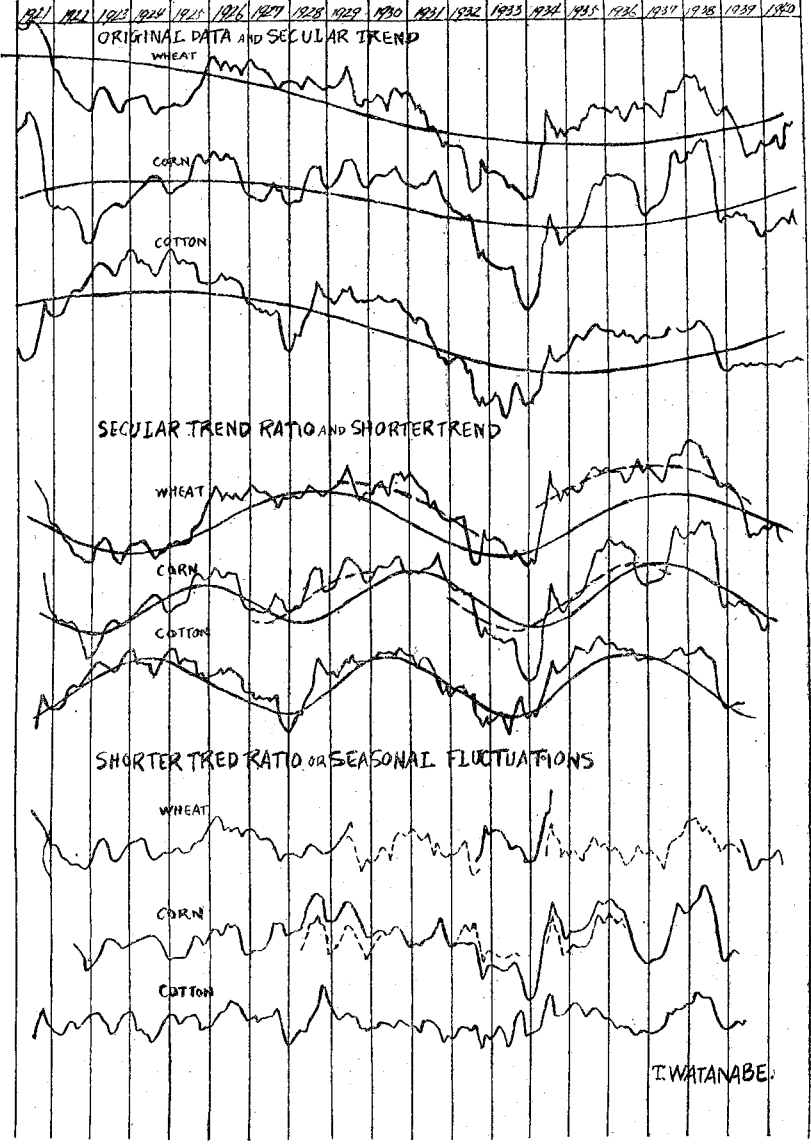
| 年次 | 收穫面積 | 放棄面積 | 噓當收量 (ポンド) | 收穫物單價 (セント) | 收穫量 (リント1000噸) |
|------|-------|-------|---------------|----------------|-------------------|
| 一九一九 | 三、九〇六 | 一、六六七 | 一、六五・九 | 三三・二 | 一一、四一一 |
| 一九二〇 | 三、四〇六 | 一、四六四 | 一、八六・七 | 一五・八 | 一三、四三九 |
| 一九二一 | 二、八七六 | 一、〇三六 | 一、三三・五 | 一七・〇 | 七、九四四 |
| 一九二二 | 三、一六一 | 八、一五一 | 一、四八・八 | 三三・八 | 九、七五三 |
| 一九二三 | 三、三三〇 | 一、四〇〇 | 一、五三・四 | 二七・七 | 一〇、一四〇 |
| 一九二四 | 三、九一〇 | 一、一八九 | 一、六五・〇 | 三三・九 | 一三、六三〇 |
| 一九二五 | 四、四六六 | 一、五八三 | 一、七三・五 | 一九・六 | 一六、一〇一 |

| | | | | |
|------|--------|--------|---------|--------|
| 一九二六 | 四四、六〇八 | 一、二二二 | 一九二・九 | 一七、九七八 |
| 一九二七 | 三八、三四三 | 一、一一九 | 一六一・七 | 一一、九五六 |
| 一九二八 | 四三、四四〇 | 一、三〇〇 | 一〇二・一 | 一四、四七七 |
| 一九二九 | 四三、三三三 | 一、二二六 | 一四二・二 | 一四、八二五 |
| 一九三〇 | 四三、四四四 | 八八五 | 一五七・一 | 一三、九三三 |
| 一九三一 | 三八、七〇四 | 四〇六 | 二二・五 | 一七、〇九七 |
| 一九三二 | 三五、八九一 | 六〇三 | 一七三・五 | 一三、〇〇三 |
| 一九三三 | 二九、三八三 | 一〇、八六五 | 二二・七 | 一三、〇四七 |
| 一九三四 | 二六、八六六 | 九九四 | 一七一・六 | 九、六三六 |
| 一九三五 | 二七、〇五九 | 五五四 | 一八五・一 | 一〇、六三八 |
| 一九三六 | 二九、七五五 | 八七二 | 一九九・四 | 一一、三九九 |
| 一九三七 | 三三、六三三 | 四六七 | 二六九・九 | 一一、三九九 |
| 一九三八 | 二四、四八八 | 七七〇 | 二三五・八 | 一八、九四六 |
| 一九三九 | 二三、九三八 | 九〇四 | 二五三・九 | 一一、九四三 |
| | | | (八・九〇〇) | 一一、七九三 |

之等を通じて知り得ることは、作物や家畜の種類によつて異なるが、市場供給量の變動は價格に變動を及ぼすと、又價格變動は市場供給を變動することである。(之は均衡經濟學の鐵則である、唯如何にして市場供給を増減するかは政策上の最大問題である)

いま上掲各作物の月別價格變動の聊かなる分析を試みて此の稿を了ることにしやう。原資料は北米合衆國農務省年報(一九二八年分)及び同作況及市況一九三八年及三九年十二月分による。其月別價格を對數規劃で表示する。次に手描法で調和曲線を引き之を長期傾向とする。其再歸周期は十五年位と見られる。次に調和曲線と原點との圖上の距離即ち百分率を以て長期變動比となし其の折線を作り更に手描法で第二次の調和曲線を引く。之は短期變動であつて六年又は九年の再歸周期のものである。此の曲線と折線との同様圖上の距離即ち百分率を以

ANALYSIS OF MONTHLY ESTIMATED PRICES PER UNIT RECEIVED BY PRODUCERS IN U.S.



北米合衆國最近の農業波動

短期變動比となし、之を折線としたものが季節變動である。

之で見ると綿花が最も規則的な六年周期波動を示し、又稍々早く變化する。玉蜀黍が之に次いで居る。小麥は六年周期が明瞭でなく九年位の變化をする様に見える。各作物の價格變化にはかなり一様性があり一般經濟循環を證明する様である。併し其の各に特異性は認められる。

農業調整行政が、最初減段契約及之に伴ふ獎勵金を農民に交付すること、而して其財源を加工税に求めたが結局一般財政の負擔に歸したこと、及加工税を徴せらるゝ商工業者からの訴で違憲との判決があり停止されたこと遂に地力維持と云ふ獎勵政策に變じたことの詳細は茲に述べない。

農民は先づ大に調整行政に努力したが後協力の程度を減じた。減段のせいもあつたらうが其以上に旱魃の影響があつて價格が恢復し再び増段するに至つたのである。例へばイリノイ州農民の玉蜀黍減段者數は一九三四年に六二%であつたが一九三七年には三八%となつた。農民は最初獎勵金で利益したが後にはさう行かなかつた。農民は獎勵金をも利害的に見る。尤も最近には再度増段によつてか又は循環的にか價格は下つて來た。(6)

地力維持の爲め中耕作物を少くし牧草を多くすることは綿花地帯の小農民特に小作農民は喜ばぬが、有畜農業地帯では普及した。各地の農業は多角化の傾向を示した。例へば玉蜀黍地帯で小麥を増し小麥地帯で豇科牧草を輪作に入れる如きである。併しこれも旱魃等の試練を経なければならなかつた。實際播種しても生育しなかつた所がある。而も主要生産地帯で減じたものは他に於て増加した傾向がある。

之を要するに、如何なる政策も自然力以上に大なる作用を及ぼし得ない、作付段別を減ぜしむる政策よりは旱魃の作用力が強く、農民を減ずる政策よりは旱魃による農民の逃亡の方が影響が甚しい。而も其旱魃の脅威が増した理由が農業機械の發達や戦争による農産物需要の増進にあるとすれば再び經濟波動の問題に歸らねばならぬであらう。

参 考 書

- H. L. Moor : Generating Economic Cycles. 1923. 註 (1)
G. F. Warren & F. A. Pierson : Prices. 1933. (3) (4)
J. Schumpeter : Business Cycles. 1939. (3)
U. S. D. A. Yearbook. 1928—38. (5)
U. S. D. A. Crops and Markets. (esp. Dec. 1939). (5)
U. S. D. A. Misc. publ. no. 269. 1939. (5)
(Graphic Summary of farm Animals & Animal products.) (5)
Journal of Farm Economics (esp. Feb. 1939). (5)

斯かる重要問題を斯く簡単に説明したのは不充分の譏を免れない。本邦米價を論じ米國土地制度を研究せられた中島教授の周到な態度の前には恥ぢなければならぬが、何となく多忙の今日止むを得なかつた。

(昭和十六年一月)